歪幻想

幻影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪幻想

【Nコード】

N8870K

【作者名】

幻影

【あらすじ】

これは人が想う、歪な幻想。影の物語。

あるひとつの共通した設定のもとに書いた、短編集です。幻想ホラーファンタジー……だと作者は信じてます。

間（前書き）

これは処女作品です。

……絶対いろいろ変な箇所があると思いますが、そこは子供だから仕方ない、ということにしておいてください。

後書きも一応書いてます。見なくても問題ないです。蛇足です。

間

これは、学校で噂されている、怪談。

音楽室には、大きな鏡がある。

これは、歌を歌う時や、演奏の際に姿勢等を見るためのものだ。

そして、隣接している準備室にも、鏡がある。

これは、水道があるためだ。

しかし、準備室のドアを開けると、二つは対面し、合わせ鏡になる。

吹奏楽部では、楽器があるため、絶対にドアの鍵を閉めてから帰らなければいけない。

しかし、本当の理由は別にある。

何故なら、あの合わせ鏡は「特別」なのだ。

午前二時、あの合わせ鏡の間に立つと、出る。

.....

「真梨ちゃん……？」

暗い廊下に、わたしの声が響く。

今日は友人の真梨が忘れ物をした。どうしても明日提出しなければならぬプリントを、楽譜と一緒に音楽準備室に置いて帰ってしまったのだった。

真梨は夜中に宿題をするので、この夜中まで気が付かなかつたらしい。

一番の親友であるわたしに電話が掛かってきたのは、日付が変わった頃だった。

「あつ！あつたよー！」

準備室から、真梨の明るく高い声が聞こえてきた。

わたしは、いつもと雰囲気が違う学校からようやく出られるのだ、と思いながら、音楽室に入った。

音楽室に入り、壁に沿って右が準備室。左は大きな鏡。

わたしたちは吹奏楽部で、わたしがホルン、真梨がクラリネットをしている。そして、楽器を吹く時の口の形を見るために、あの大きな鏡を使うのだが、真夜中の今、昼間の面影はなく、どこか不気味で恐ろしかった。

「真梨ちゃん、あつたの？」

「うん。ごめんねえ？こんな時間に、つき合わせちゃって。」

「ううん。いいんだよ。でも、早く帰ろっ？」

準備室から、紙を持った真梨が出てきた。少し茶色がかつたセミロングの髪を、いつもの癖で指に巻いていた。

そして、返事をしようとしたのか、真梨が口を開いた時

じつ、

と、硬い物に何か当たる音がした。

わたしと真梨しかいないはずの、この部屋で。
え？と思った、その一瞬後。
ぐるり、と世界が反転した。一瞬の浮遊感の後、立ちくらみのよ
うな感覚が身を襲い、ぺたん、と座り込む。
頭をあげると、そこには何も無かった。
真梨さえも。

「真梨、ちゃん…!？」

立ち上がり、周りを見回す。目の届く範囲には、誰もいない。
準備室は？と、恐怖を感じながらも、入る。
そこには、水道。そして、鏡。
よく見ると、音楽室の大きな鏡と、合わせ鏡になっていた。
永遠に続く、鏡の無限回廊。
そして、いるはずの無い、人影が鏡の中に、一つだけ見えた。
ゆらり、と歪む、黒い影。その影が、にい、と嗤^{わら}った。
心臓が、飛び跳ねる。体が硬直し、動かない。
不意に、影が口を動かした。

「え…」

口から声が漏れたとき、それにかき消されるように、影は消えた。

それから先は、あまり覚えていない。
おぼつかない足取りで、家に帰った。

次の日の朝、真梨の母親から電話が掛かってきた。

朝起きて、真梨の部屋を見ると、真梨がいなかったらしい。
真梨は、それから行方不明だ。

わたしは、それから噂を広めた。

あの時の時間が、だいたい二時だったからそうしただけで、
時間
は関係ない。

ただ、知ってほしいのだ。

また、誰かが消えないように。

もし、面白半分で行ったのなら、それは自己責任だろう。

何も知らず、消えた真梨のような人は、出来ないでほしい。

…鏡の中に、攫われないように。

…あの影に、出会わないように。

『あの子はもらっていくよっ。』
そう告げ、消えた黒い影。

間（後書き）

かなり緊張してます。（汗）

これは最近書いたものですが、文章がおかしい……
自覚はあるけれど、直せません。その技量が無い。うん。
そして、それを全て年齢の所為にする私。

これから宜しくお願いします！

……部活で時間ないので、いつ投稿するか分かりませんが。

殺（前書き）

グロテスク、注意。

…どれくらいがグロイのかさっぱりなんですけど。

殺

私の前には、彼と、人間であつたであろうモノがあつた。

彼は愛用のカッターナイフを握っている。

紅く染まつたそれは、少し欠けた月に照らされ、ぬらりと光っていた。

彼の足元にある、かつて人間だつたものの、血を吸つて。

「…駄目でしょ、こんな所で。人気の無いとこでやってよ。」

私は言う。

すると、彼はようやく私に気付いたのか、こちらを向いた。

彼は、笑っている。

歪な笑みを、浮かべていた。

「夜中の散歩はやめておいた方がいいよ？こんな、狂人に出会つたりするから。」

それを証明するかのように、彼はその刃を私に見せた。

けれど、そんなものを見るよりも、貴方が返り血を浴びたその姿の方が、よっぽど不気味で危険な気がするのだけれど。

服も髪も、紅く染めた彼の姿は、背景の月の所為か、大量の血液の所為か、とても幻想的だ。

まるで、儂い夢のよう。

そんなことを考える私は、このあまりにも強い鉄の臭いで思考がおかしくなっているのかもしれない。

「元から知ってるって。それに、夜の散歩は趣味。貴方にやめろって言われてもやめないから。」

彼はそれを聞いて、困ったように苦笑いをした。当たり前前。

この壊れた元人間がなければ、それは微笑ましい光景なのだろうが。雰囲気なんて無い。全てぶち壊しだ。

私はそんな無意味なことを思って、それに近づいた。

「…また、派手に殺ったね…」

月明かりに照らされて、私はようやくその死体を目にした。

ソレは、首と腹の中身をぱっくりと見せていて、頭はかろうじて皮一枚で繋がっている。

その頭も、眼は何処へいったのか、空ろな暗い眼窩を覗かせていたり、口は裂け、まるで怪談の口裂け女だ。

腹も、普通の人間が見たらトラウマになるような、人間を冒瀉していると思えない悲惨な状態だった。生々しい肉は傷口からはみ出して、自身の血を纏っている。

「そうかな？一応、誰か判別できるくらいにはしたと思うけど。」

「何処がよ！ただの肉塊じゃない。こんな知り合いいたら、それこそ狂人だつてば。」

うーん、と唸っている彼の姿は、一般人そのもの。

こんな彼が、私よりも狂っているのだから、わからない。

それとも、狂人は呼吸をするのと同じくらい当たり前前におかしいこ

とをするのだから、これが普通か。

ああ、何て無意味な思考だろう。

彼は狂っている。それだけで、充分なのに。

「でも、死んだ人間のことなんて、どうでもいいし。」

彼にとって、生有るものも、死ねばただの肉塊でしかないらしい。

それを言ったら、墓なんて無意味としか言いようがないと思うのだが。

彼は、前に私に言った。

埋葬は、残された者の感傷に過ぎない、と。

死んでから生まれるもの等、本当は無いのだ、と。

彼は宗教を侮辱する気なのだろうか。

いつか信仰者に刺される気がする。

「はいはい。じゃ、帰ろうね。」

「…引つ張らなくてもいいと思うけど。」

目的を散歩から彼の家に変更し、向かう。

前は殺した後、殺害現場に朝までいたことがある。

まったく、捕まりたいのだろうか。

そんなこと、どうだっていいのに。

私は、どうして素直じゃないのか。

この関係を、失いたくないだけのくせに。

私は、彼を引きずりながら、大きな溜め息を吐いた。

歪で狂った、私の日常。

殺（後書き）

今日はホラーというよりグロテスク。

…私の歳でこれを好きな人はいるのか。

まだ義務教育なんですけど。

注・この下は雑談です。

新学年、ということ、いろんなことを学校でするのですが、先日
は「好きな漢字一字を書く」といういまいちよくわからないもので
した。

そして、ちよつと（？）おかしな思考回路の持ち主である私は、「
狂」とか「歪」とか書きたかったのですが、没
さすがに、書けません。（汗）

一応は読書好きの大人しい子で通っているのですし。(たぶん)

最終的に「幻」と書きました。

「夢」の方がよかったかなあ？

ふわり、と桜の花びらが、少女の頭に落ちた。

その少女は幼く、小学校にも入っていないほどの歳だった。

桃色のワンピースを着て、春とはいえまだ早いサンダルを履いている。そして、透明なガラス玉の付いたペンダントを首に掛けていた。

「えっとね、これはね、『さくら』っていうんだよね？」

問うように、言う少女。

周りには、誰もいない。

辺りには、少女の頭の上で咲き誇る桜の大木と、その花びらを浮かべる池。いかにも公園、といった風景だ。遊具も、ブランコが見えた。

ざあ、と風に揺らされた桜が音をたて、舞い落ちる。その中で、少女はくるくると回った。同じ色のワンピースが風に踊る。

「しってるよ。このさくらは、『ソメイヨシノ』っていうんでしょ？」

答えは返ってこない。

だが、少女は満足げな顔をして、笑った。

無邪気な、子供らしい、可愛い笑み。

そして、

「そうだよ。これは染井吉野。生きた屍。」

返ってくるはずのない答えが、返ってきた。

音も無く、その声の主は少女の隣に立っていた。

漆黒に身を包んだ、青年が。

どこか幻想的で、夢のように消えてしまいそうな、そんな印象を受ける青年が、少女の傍に、突然現れた。それは、さながらホラー映画のように、突然に。

「しかばねって、なあに？」

少女に驚いた様子はない。青年がそこにいることが、当然のようだった。

少女よりもかなり背が高い青年は、少女を見下ろすようにして言う。

「君みたいな子供に教えるようなことじゃないよ。別に、知る必要も無い。」

「え〜。いろんなことをするのはいいことだ、っていったのは？」

「…僕だね。でも、状況が違うから。」

「あー！ばかにしたなっ！！」

「…そういうことは分かるんだね。」

ふう、と頬を膨らませる少女に、苦笑いを浮かべる青年。

「帰らなくていいの？」

「え〜？もっ〜？」

地面に溜まった花びらで遊ぶ少女に、青年は告げる。

空は薄く赤に染まり始めていた。

少女は遊ぶのを止め、とことこと走る。

「じゃあ、またあしたね？」

「そうだね。　　ばいばい、遙火。」

「ばーいばい！！」

とててて、と走る少女の姿は、いつの間にか見えなくなる。

桜が、咲いている。

ぬらり、と不気味に光る月に照らされ、舞い散る桜の花弁。

その中に、青年はいた。

ふわり、と散る花弁をその手に乗せ、それを見る。

「染井吉野は、種子を作れない。子を成すのが生きる意味だって、誰かが言ってたなあ。じゃあ、この桜はどうなんだろうね？」

闇に溶け、聞こえなくなる声。

華（後書き）

種子を作れない、というのはちょっと違いますが… まあ、いつか。というノリです。はい。

遙火ちゃんはまた出てきます。

もう一人はスルーし

て下さい。突っ込んだらダメです。

池

不意に、道端の池が目に入った。

学校の帰り道、いつも通る見慣れた道。もちろんこの濁った池も、今まで何度も見てきた。

でも、いつもと違う気がする。

何故かは、分からない。分からないのが嫌で、私は池を覗きこんだ。濁った水面に映る、自分の歪んだ顔。その奥の、池の底に焦点を合わせる。

緑色の水草が揺れている。大小様々な石が転がっている。何の変哲も無い、池の底。

私ははあ、とため息を吐いて、帰ろうと顔をあげようとした。その時、

「ひっ……!?!?」

微妙な光の反射で、池の底にある岩の狭間から、白い手が出ているのが見えた。

生気を感じない、無機質な手が、岩の間から覗いていた。恐怖を感じ、後ずさる。そして、そのまま走った。

見間違いだと思って、家に帰る。

ぴちゃん

夕食を食べていた。

両親は共働きで、部屋に一人だった。

皿の上に物が無くなり、台所に持っていく。

水を皿のため、風呂に入ろうと風呂場に向かう。

すでにお湯はぬるくなっているだろう、と思いながら風呂場のドアを開け、浴槽を覗きこんだ。

「え？」

一瞬、意味が分からなかった。

浴槽から、白い何かが見えたのだ。

そして、それが白い腕であることに気がついた。

「っ…!？」

喉が絞まり、声は出なかった。

体は硬直し、動けない。

明らかにおかしい、在るはずの無い死人のような腕が、にゆう、と私に向かって伸びてくる。

水から這い出たそれは、腕にしては長く、無理矢理関節を外し、伸ばしたようだった。

ずるう、と湿った音をたてながら、それは浴槽から壁に這うようにこちらに向かってくる。

そして、ついにそれは私の腕に届いた。

しかし、その感触は人間の肌のものではなく、軟らかいゴムのよう

な、大量に水を含んだ異様なものだった。

「　　つ！！！」

その感触に、ようやく声が出た。

甲高い、出した事もないような金切り声が、浴室に響く。

逃げようと、身を引いた。

だが、腕はべつとりと私の腕に張り付いて離れない。

恐怖に、その腕を振り払う。

べちゃ、と奇妙な音がした。

それは、水を含んだ腕が、振り払われて浴室の壁に跳び、その反動に耐えかねて形を維持できなくなった音だった。

赤い液体が、壁に付いた水滴に滲んで、流れる。

崩れた異様な赤い肉が、壁にべつとりと張り付き、それでも重力によつてずると落ちていく。

その光景に体を硬直させていると、ぴちゃん、と魚が跳ねるような音がし、浴槽に目をやる。

そして、目が合った。

白い、全体を見たことが無い眼が、水の中に浮かんでいた。濁った、魚のようなそれに、見つめられる。

じい、と。

それは何故かぎよろり、と眼を動かして、不意にとぶん、と水の中に帰っていった。

去った？

少し身を乗り出し、赤い血で濁った浴槽を見る。

何も無い、と思つた時。

にゆう、と白い腕が伸び、私の頭を掴んだ。

「え」

口から出たのは、それだけだった。
異様な力で体を引かれ、ざばん、と浴槽に引きずり込まれた。

.....

翌日。

とある少女は、ニュースを見ていた。

その少女は幼く、まだ小学校にすら入っていないであろう年齢だった。

白いワンピースを着て、首に透明なガラス玉の付いたペンダントを付けた少女は、小さなコップに入ったジュースを飲みながら、テレビを見ていた。

中学生が行方不明になった、という内容のニュースを、見ていた。

「みずのなかはね、『いかい』なんだよね？」

「そう。」

突然、少女の後ろから声が飛ぶ。

それは漆黒の青年で、いきなり現れたにも関わらず、少女は当然のようにそちらを向く。

青年は言葉を紡ぐ。

「水の中は、死の世界。暗い昏い闇の世界。きっと、僕と同族に招かれたんだろうねえ？」

「くらのの、こわいよ。」

「君は自分で選べるから。嫌なら来なくていいし、来たいのなら来ればいい。」

「じゃあ、いかない。」

「それは残念。」

全く残念ではなさそうに、嗤って言う。
そして、ぼつりと咳く。

「でも、きっと、君はこちらに来るよ。」

池（後書き）

ホラー、というよりも、ただの落書きな気がします。おかげでタイピングが早くなりました！な感じです。

ホラーよりもファンタジーの方が好きなんですけど、長いのは書けません。

頑張ってあげれるようにしたいです！

まあ、結局自己満足の塊なんですけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8870k/>

歪幻想

2010年10月11日07時54分発行